

「標題学」方法序説

相田 満

国文学研究資料館

The introduction for the method of "Studying a Title"

Mitsuru AIDA

National Institute of Japanese Literature(NIJL)

"A title" is not the work itself. But the relation with the work to which it is given is very close. And it not only expresses and explains the contents, but as for it, the charm of a work influences them intuitively. In the present age, a "title" is in various fields. Furthermore, it may induce a large amount of wealth. However, the research which tackles it is rare. Though it was familiar, since the example is too much huge, researchers will not be able to hold a clue. However, the start of research is being opened by development of information machines and equipment and resources. By this report, I will try the consideration about the "title" in connection with the classic family register of Japan and China. I want to specifically try the analysis from viewpoints, such as ontology of succession nature, acceptance, and a category title.

1. 「標題」はどこにある

およそ人間の文化的生産物に「標題」は不可欠である。しかも、「標題」が付与される対象はそれだけに限らない。工業・農業・サービスなど、およそ人間の社会生活に関連するさまざまな分野に及ぶ。

たとえば、西洋ロマン主義盛行時には、何事にも「詩化」された解釈を加える鑑賞態度と曲作りが流行し、「標題音楽」と呼ばれたものが数多く作られた。また、オペラの歌姫にあやかった「ピーチメルバ(Pêche Melba)」のように、フランス料理では、聞いただけで想像力をかき立てられる、詩的な意匠の凝らされた命名も多く行われ、今に至っている。

また、「商標」などに至っては、命名されるべき実体が誕生するよりも前に名前が案出され、登録がなされている。中には".tv"を獲得したツバル国のように、テレビ局がドメイン使用権を巨額で購入したおかげで、国連加盟を果たせたほどの利権を生んだりもしている。その一方で、その意匠の剽窃やブランドイメージを損なう異業種での使用行為(ポリューション)をめぐる訴訟も起きており、「標題」の社会生活への影響の大きさをうかがわせている。

ところが、「標題」を体系的に扱おうとする研究は稀少なものは、事例があまりにも多様で膨大であるため、手がつけられなかったのであろう。

しかし、情報機器の発達と情報資源流通の活性化により、対象事例の取材と蓄積、そして分析作業が格段に容易となった。研究の端緒は開かれつつあるとあってよかろう。

2. 「標題」とは何か

概して、「標題」というものは「命名」という創作行為と密接に関わり、その対象物(作品)と不可分に結びつき、直感的にその内容を表現・説明するだけでなく、対象物(作品)

それ自体の魅力をも左右する。すぐれた標題は、その作品の魅力を増し、あるいは未だそれにふれていない鑑賞者をいざなうものといえよう。

「標題」は、多く人間の文化的創造物（作品）に付与されるが、作品そのものではない。あたりまえのように存在するが、それを単純に「固有名詞」のように言語の機能面で割り切りつつくるには、不十分である。それは「標題」というものが、あまりにも人間の深層、すなわち生理的・文化的・社会的な問題と深くかかわっているからである（参考文献）。

「標題」は「表題」と書かれることもあるが、両者に意味上の差はない。辞書では「①書物の表紙にしるされた書物の名。外題。②演説・談話・芸術作品・演劇などの題目。

【広辞苑】のように書かれるが、英語では、Title, Label, Subjectなどがあてられ、作品の内容をさらに細分化するために使用される「見出し」もその範疇に含められ、微妙にニュアンスが異なる。

しかし、日本や中国の古典籍の世界では、章立ての見出しや部立てを明示するための語句を「標題」と呼称することが一般的であった。たとえば、「勸学院の雀は蒙求をさえずる」という諺で著名な唐の李翰撰の『蒙求』は、宋代に入り『標題徐状元補注蒙求』という注釈書が近代に至るまで流布したが、ここでの「標題」は、人物の故事が四言の詩に仕立てられたものが見出しと兼ねられていたのを呼称するものである。

室町時代の注釈書、『蒙求抄』（清原宣賢）は、「標」を「標ハ木ノ梢也。本ノ叢ノ中カラ拔出タ心ソ」、「題」を「題ハヒタヒ也。ヒタイノヤウニ指出タ心ソ。」と説明し、木の梢のように、ほんの一部分を示すことでその内容を示す意味で解釈している。内容物の表象を担う機能を持った言葉であることが古くから認識されていたわけである。

この理解に立てば、「標題」の概念は作品の外側を覆いくるむかのように名付けられたものだけでなく、見出しのための「目次標題」や、部類・部立てのための「部類標題」のように、作品内部を構造的に分類するための指標としても「標題」の語が使用されていたことが分かる。その意味で、本研究で扱う「標題」とは、日本・中国・英語の言語相による差異はなく、「タイトル」「ものなまえ」といった類語を有するものであるということをおこわっておこう。

3. 和漢古典籍における「標題文芸」へのアプローチ

国文学研究でも、「標題」の重要性についてはこれまで意識されることはなかった。しかし、実際には「標題」に意匠を凝らした作品は少なくなく、継承性などの諸点でも、その重要性は追究されるべきだと考え、その文芸性と意匠の分析を目指し、和漢古典籍を中心とする「標題文芸」の研究というコンセプトで共同研究をはじめ、その第一年度の成果を報告書にまとめた（参考文献[1]）。

分析対象を古典籍に限定する理由は、「標題」の意匠についての評価や故実の言説が取材可能なこと、「標題」自体が独立した作品も通行していたことなど、文化的継承性・表現技術・評価言説などの諸点で、現代を再照射可能な典型事例の分析とモデルの構築が期待されるからである。

具体的には、およそ知的成果物に不可欠な「標題」の意匠について、その「作品標題」と「目次標題」の分析と分類作業を試みるものであるが、ここではコンピュータと親和性の高い事例を中心に、その成果の一端を紹介しよう。

3.1. 「書名標題」の分析

3.1.1 書名標題の総体

和漢古典籍には、その書名標題に使用される語句を指標として、その作品のジャンルや特質、さらには影響・関係が読みとれることが多い。

そこで、書名標題の総体に対して1～3 gram 程度の使用文字あるいは形態素を抽出するという手法で分析を行えば、書名標題を指標とする壮大な相関関係を求めることが理論上は可能である。

しかし、書名の総体を求めるためには、いくつかの課題が残る。

まず第一に、使用文字種の問題がある。日本の近世以前の典籍は国文学研究資料館の『国書基本データベース』（『国書総目録』と『古典籍総合目録』を下敷きとする）から、中国典籍は二十五史の経籍志類データが流通している。また、仏教書では『大蔵経』などからもデータを入手可能である。しかし、そのままの形では分析可能な状態にはなっておらず、書名の抽出作業、字体の包摂作業が必要となる。また、テキスト処理の容易な JIS X 208 に限定した形でもある程度の傾向は見渡せようが、たとえば『国書総目録』では UCS2.0 によっても 400 字弱の外字が発生するなど、使用漢字字種の不足を補わねばならない問題もあるからである。現在、この問題の解決に向けてデータを整備中だが、たとえそれを解決したとしても、得られた結果は、膨大なものとなることが予想され、その成果をいかにして第三者に利用可能な形に表現し、納得させる分析が可能となるか、それが第二の課題となる。

さらに、書名表記の揺れをどのように解決するかという問題もある。たとえば、1冊の古典籍に現れる書名タイトルには、「外題」「内題」「柱題」「目録題」などさまざまなものがある。この点については報告書の中で入口敦志氏が指摘（参考文献[4]）した所だが、『日本霊異記』の正称が『日本国現報善悪霊異記』であるような次元にとどまらない。『好色一代男』の江戸版の外題が『世之介／好色一代男』と『好色一代男』の巻によって交互に現れるなど、厳密性を求めようとしても、どうしてもある程度は目をつぶらなければならない所もある。これが第三の問題である。

これらの点は今後も完全に解決する目処は立ちがたい。ある程度は、割り切った考え方をし、それぞれの典型例を抽出した上で、精細な分析を施した後に、全体像についての仮説を提示することが現実的だろう。

3.1.2 文字数の文化史

総体としての基礎データの様相は上述のとおりである。しかし、それでも分野や観点を絞り込んでいけば、ある程度は確度の高い結果は得られる。

たとえば、書名標題の特質の内、古くから言われていることに、歌舞伎などの芝居の外題が七・五・三の奇数字数を尊ぶということがある。奇数が陽の数であり、俗に言う「ゲンかつぎ」になるからである。

この点についても入口氏が『国書基本データベース』を使用して検証を試みた。そして、

一目瞭然、浄瑠璃・脚本といった興行に関わる演劇関係の外題は圧倒的に奇数文字の題が多いことがわかる。

対照的に浮世草子・読本・滑稽本・人情本といった小説類は偶数と奇数の比がほとんど変わらないと言って

いい。その中で黄表紙が奇数文字を多くとっているのは芝居との関係を考える上で注目すべき点であろうか。

という結果を得た。芝居に関わる外題の場合、興行の看板に掲げられることが多く、小説

などの出版形態によるものと表記の差を生んだと推測する。こうした事情を勘案すれば、前項で述べた書籍内部の表記の差はある程度捨象して考えることができ、確度の高い分析結果を得られたといってもよかろう。また、時代を区切ってみれば、元禄が一つの境目となる傾向がうかがえるということから、その背後に何があったのか、文化社会的・比較文化的観点からも興味は尽きない。

3.1.3 書名標題の形態素

画期的作品が登場した後、その意匠にならって、書名にその名称を使用する続撰書が陸續とあらわれることは多い。そうした典籍を分析する際には、インターネット上に流通する多彩なコンテンツ群が絶大な効果を発揮している。

稿者がかつて唐の李瀚撰の『蒙求』の意匠にならった続撰書の調査を行った際には（参考文献[5][6][7]）、冊子体の『国書総目録』の全頁を行ったものだったが、その頃から比べれば、隔世の観があるといわざるを得ない。しかし、それでも今なおネット上で取材可能な典籍以外にも新たな典籍が見つかることがあることには十分留意しておかなければならない。

書名標題の継承性には、この『続蒙求』『本朝蒙求』のように、先行書名をそのまま引き継ぐものと、『〇〇抄』『〇〇物語』のように、その典籍の性質を表現する意匠のみが引き継がれるものがあるように思える。

後者のものについては、安保博史氏が「…草」型という形態素を持つ俳書についての分析があり（参考文献[8]）、『犬子集』撰集時に、書名に「集」を付することが、俳諧を和歌集や連歌集と同列に扱う不遜なことだということで「犬子草」とするべきだという非難があったことが紹介されている。結局書名は『犬子集』に落ち着いたが、その後も謙称としての「…草」型の書名は、俳諧では数多く引き継がれるが、その間にも、『徒然草』を意識することにより自らの学芸のステイタスを称揚せしめる序文が行われるなど、書名標題に付される形態素にも複雑な文化的背景が存在することを指摘している。

3.1.4 書名標題の命名原理

本研究のテーマの遂行のためには、多量なサンプルの調査はもちろんだが、その前提として、その中味の特質についての習熟も求められる。たとえば、渡辺信和氏は御伽草子 901 タイトルの命名原理についての考察を試み、以下の分類を得ている。

- (1) 標題の中に含まれる形態要素と形式要素
 - a. 形態要素
 - ① 絵・絵巻・絵詞・画 ② 草紙・草子・双子・さうし ③ 巻物など
 - b. 形式要素
 - ① 物語 ② 記 ③ 論 ④ その他
 - c. 准形式要素
 - ① 縁起 ② 本地 ③ 由来・因縁・歌合など
- (2) 命名のあり方
 - a. 主人公（人間など）を標題とした例
 - ① 名 ② 職掌（「海女物語」など） ③ 属性（「小男の草子」など）
 - b. 退治されるものの名前
 - c. 主人公でない登場人物
 - ① 主人公の家族の名など ② それ以外の登場人物
 - d. キーワードとなるものの名前（「姥皮」など）
 - e. 対応関係を持つ標題
 - ① 主人公の男女、対立する者（「楊貴妃物語」と「玄宗皇帝」など）
 - ② 人間と神（「菅丞相」と「天神の本地」など）
 - f. 結果として顕現したものを示す標題（「榛名山御本地」など）
 - g. 謡曲・幸若・説教などに関わる御伽草子の標題
 - h. 改作物語の標題
 - i. 擬人化された作品の標題

- ①擬人化された作品の標題（「魚虫歌合」など） ②軍記型標題
 j.その他
 ①時節 ②著者 ③行為 ④場所 ④主題の意味（「そぐり物語」など）

こうしてみると、挙げられた分類体系からは、御伽草子という特定ジャンルに収束しきれない、普遍的な原理もうかがえる。最終的には、ジャンルを超えて、さまざまなものの名前の生成原理についてもこうした手法を及ぼすことが必要であろう。

3.2. 「部類標題」の継承性について

ものごとを「類」という概念で整理・体系化することは、人間の認知活動において自然に行われることで、「標題」を付するという行為とは、分類意識と不可分に結びつき、ことに「目次標題」や「部類標題」においては、そうした傾向が顕著に現れる。

とりわけ和漢古典籍の類聚編纂物は、物事を「類」（近似するもの）概念で集積し、整理・体系化を施したものである。その認識は世界内存在全てを志向し、階層的に表現された知識体系は、それ自体がマイクロコスモスを形成する「分類概念語彙」、あるいは当時の表現を借りるならば、「部類」のための「標題」、すなわち「部類標題」によって統御されていたといっても過言ではない。

こうした発想と関連の深い概念に、「オントロジ」がある。

哲学用語「存在論」に由来する「オントロジ」は、情報学においては「概念間の関係の明確な定義の集まり」として、情報リソースから独立した上位層^{メタレイア}に位置付けられ、情報を意味的に組織化、検索、ナビゲートするための新しいパラダイムとして注目を集め、セマンテックウェブをはじめ、人工知能分野を中心に急速に研究が進展している。

しかしこれはまた、有史以来、日本や中国で幾度も編纂された、類概念（分類概念語彙）によってまとめられた古典的な辞書・辞典（＝類書）が、きわめて継承性の強い、良質な「オントロジ（知識概念木）」の宝庫となっているように、伝統的な発想にのっとったものともいえよう。

試みに、中国における類聚編纂物七種と日本の『和漢朗詠集』と現代の語彙資料である『分類語彙表』の中から、漢字列文字列のみを抽出し、共通する語彙を各典籍ごとに個別に比較してみただけでも、さまざまなことが分かってくる。

まず第一に、挙例の各典籍間の親疎の度合いが、語彙の一致率比較によりある程度判明することである。たとえば、『李嶠百廿詠』『芸文類聚』『初学記』『事類賦』の四種は、いずれも、平安期以前の漢詩文の表現における影響の指摘される典籍群だが、分類用概念語彙の一致率から見ると、きわめて類縁性の高い典籍群として位置づけられるということが言える（参考文献[10]）。

次に、分類用概念語彙に使用される語句は、少ないものでもその 1/4 が、多いものではその半数が現代日本でも使用されているということである。

そして一致する語彙が、自然景物・年中行事・人事関係の語彙に集中しているということは、連歌に使用される語彙が自然言語ときわめて親近性の高いものであるという藤原鎮男・立川美彦の報告（参考文献[11]）を補証するものとなっている。そして、このことは、古典語彙と現代の語彙をシームレスに接合可能であることを示唆するものといえよう。

3.3. 「標題文芸」の影響—「千字文」を例として—

「目次標題」と関連の深いものとして、独立して享受されることを念頭に作成された「独

立標題」がある。古いものでは『千字文』『蒙求』などの四言詩の対句体裁を持ち、詩人の創作意欲から発露して、暗誦させることにより効率的な知識伝達を目的として作られたもので、類似の形態はさまざまな分野に及び、多くの典籍の「目次標題」や『三字経』のように形を変えたもの、さらに日本で同様の意図で作成された教導和歌も同種の意匠の上に作成されたと考えてもよからう。その意味で、まさに「標題文芸」と名付けるに相応しい作品群である。

こうした作品は、暗誦を旨として作成されたものであるゆえ、その影響は計り知れない。たとえば、『千字文』は奈良朝官人による手習いの跡が木簡に残されているように、上代文学の頃から深い影響がある。

『千字文』は、JIS-X 208 環境下では、全ての文字をコード化することはできないが、現在ユニコードが通常的环境でも使用可能となったおかげで、UCS2.0 レベルでは完全コード化が果たせる。その検証のためには、『千字文』テキストの異体字、さらに避諱字も念頭に置いた処理が必要だが、試みに『風土記』に対してデータをあてて検証してみたところ、地方毎に精粗が生じることが判明した。こうした手法を他の作品に及ぼせば、知識基盤を観点から文化史を読み解くことも可能であろう。

4. まとめにかえて

以上、「標題」という観点から文学を読み解くための方法について、いくつかの観点による大綱を述べた。「いかにデータを作成するか」ということへ腐心する状況から、「多量の情報をいかに組織化し」、「既存の情報からいかに有用な情報を汲み取るか」というパラダイムへの変化の中、国文学研究も、新たな研究段階を迎えようとしていることを感じているのは稿者のみにとどまるまい。

謝辞

本研究では、文部科学省科学研究費補助金萌芽研究(H14-17)「和漢古典籍における「標題文芸」の基礎的研究」(課題番号 14651078)および、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)(H15-18)「和漢古典学のアトログモデルの構築」(課題番号 15300082)による研究成果の一部を利用した。研究分担者・協力者の各位に深く感謝する。

参考文献

- [1]佐々木健一,タイトルの魔力—作品・人名・商品のなまえ学—,中公新書 1613,2001
- [2]国書基本データベース <http://base4.nijl.ac.jp/~koten/>
- [3]相田満,標題文芸(1)—和漢古典籍における「標題文芸」の基礎的研究—,文部科学省科学研究費補助金「萌芽研究」第1年度報告,2003
- [4]入口敦志,題名の文字数,標題文芸(1),pp6-19,2003
- [5]相田満,幕末明治期の『蒙求』,国際日本文学研究集会会議録,国文学研究資料館 18,pp109-133,1995
- [6]相田満,『蒙求』型類書の世界,和漢比較文学会編『和漢比較文学の諸問題』,汲古書院,pp109-128,1988
- [7]相田満,異種『蒙求』覚え書き—日本における『蒙求』享受の一現象—,中央大学国文 28,pp1-10,1985
- [8]安保博史,俳書標題の意匠について—『…草』型標題を中心に—,標題文芸(1),pp20-32,2003
- [9]渡辺信和,御伽草子の標題について(ノート),標題文芸(1),pp33-69,2003
- [10]相田満,「標題」のさまざま—現代と脱領域的な視点から,標題文芸(1),pp70-81,2003
- [11]藤原鎮男・立川美彦,連歌の語彙にみる普遍性と個別性,国文学研究資料館紀要 22,pp213-262,1996